

[013] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10257>

出版情報：語文研究. 13, 1961-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

学会彙報

行事その他

講義題目 昭和36年度 第一学期 (自昭和36年4月 至昭和36年10月)

(大学院)	国語学特研 (日本語の語彙)	福田教授
(大学院)	国語学演習 (万葉集卷十六)	福田教授
(学部)	国語学演習 (とりかへばや物語)	福田教授
(学部)	国語学概論	福田教授
(大学院)	国文学特研 (国学の方法)	中村教授
(学部)	国文学演習 (近世後期小説)	中村教授
(大学院)	国文学 (近世文学史)	中村教授
(学部)	国文学演習 (万の文反古)	中村教授
(大学院)	国語学演習 (イソボのフアブラス)	春日助教
(大学院)	国語学演習 (今昔物語集卷二十二)	春日助教
(学部)	国語学 (音韻と文法)	春日助教
(大学院)	国文学演習 (後撰集)	今井助教
(学部)	国文学 (平安朝文学史)	今井助教
(学部)	国文学特講 (近代作家論)	重松助教

(学部)

讚岐典侍日記の研究	藤清治
夏目漱石論	岩並正夫
浜松中納言物語作品考	小笠原正紹
方丈記論	安部啓一
教訓論における西鶴	石田忠彦
近松道行考	橘英哲
万葉集挽歌考	西村美佐子
かげろふ日記論	調明子
徳田秋声論	神崎祐蔵
方丈記の語法序説	鹿島精利
火野葦平論	中雄一
万葉集卷五の研究	倉野順子
近代作家論「芥川竜之介」	松山誠之介
所謂国風暗黒時代における漢詩と和歌の消長	金原理
和泉式部論	江口年子

(大学院)

今昔物語集天竺部の研究	太田惠美子
古事記における用字法の研究	原口裕

右終了後、市内大濠、那の津荘にて予饌会。

一、昭和36年度九大国文学会総会並びに研究発表会

(昭和36年5月21日)

古事記における会請引用「□之・□者」の用字について

原口 裕

元禄初期の其角

石川 八朗

近世初期儒学者のテニヲハ観について

佐田 智明

露伴「運命」について

瀬里 広明

いわゆる和歌仏道一如観

井出 恒雄

「吉氏私教類聚」考

目加田 さくを

了悟光源氏物語本ノ事

今井 源衛

右終了後、那の津荘にて懇親会。

受贈雑誌 (自昭和三十六年二月至昭和三十六年七月)

文学 (岩波書店) 二月号、三月号、四月号、五月号、六月号、七月号

国文学解釈と鑑賞 (至文堂) 二月号、臨時増刊号 (三〇三号)、三月号、四月号、五月号、六月号臨時増刊 (三〇八号)、七月号

国語研究 (国学院大学国語研究会) 十一号

日本文学 (東京女子大学日本文学研究会) 十五号

紀要 (共立女子大学短期大学部) 第四号

文芸と思想 (福岡女子大学文学部) 二十号

学苑 (昭和女子大学光葉会) 一月号、二月号、三月号、四月号、六月号

月号

国文 (お茶の水女子大学国語国文学会) 十四号

国文学解釈と教材の研究 (学燈社) 二月号、三月号、四月号、五月号、六月号、七月号

国語と国文学 (東京大学国語国文学会) 二月号、三月号、四月号、五月号、六月号、七月号

国語国文 (京都大学国文学会) 一月号、二月号、三月号、四月号、五月号、六月号

国学院雑誌 (国学院大学) 昭和三十五年十二月号、昭和三十六年一月号、二月号、三月号、四月号

白路 (白路社) 一月号、二月号、三月号、四月号、五月号、六月号

万葉 (万葉学会) 三十八号、三十九号

大谷学報 (大谷大学大谷学会) 四十の三

佐賀龍谷学会紀要 (佐賀龍谷短期大学) 八号

立命館文学 (立命館大学人文学会) 昭和三十五年十二月号、昭和三十六年一、二、三、四、五月号

説林 (愛知県立女子大学) 七

人文社会国語国文学篇 (弘前大学人文社会学会) 二十二号

アメリカーナ (米国外交文化交換局) 七の一、三、四、五、六

八雲 (八雲短歌会) 昭和三十六年二月号、五月号

論究日本文学 (立命館大学日本文学会) 十三号、十四号

大分大学学芸学部研究紀要 (自然科学) (大分大学学芸学部) 十号

大分大学学芸学部研究紀要 (人文社会科学) (大分大学学芸学部) 十号

女子大国文 (京都女子大学国文学会) 二十号、二十一号

女子大文学 (大阪女子大学) 十二号

女子大文学 (大阪女子大学) 十二号

女子大文学 (大阪女子大学) 十二号

女子大文学 (大阪女子大学) 十二号

女子大文学 (大阪女子大学) 十二号

女子大文学 (大阪女子大学) 十二号

- 実践文学（実践文学会）十二号
- 中世文芸（広島中世文学研究会）二十一号
- 資料目録（同志社大学人文科学研究所）七の四、八の一
- 肇国（肇国神祇連盟）一月号、二月号、三月号、四月号、五月号、六月号
- 王朝文学（東洋大学王朝文学研究会）五号
- 日本文学誌要（法政大学国文学会）復刊一号、二号、五号、六号
- 未定稿（未定稿の会）八号
- 国語学（国語学会）四十三、四十四、四十五
- 近世文芸稿（広島近世文芸研究会）
- 岐阜大学研究報告—人文科学—（岐阜大学文学部）九号
- 学大国文（大阪学芸大学国語国文学研究室）四号
- 文化（東北大学文学部）二十四の四、二十五の一
- 山口大学文学会誌（山口大学文学会）十一の二
- 金沢大学法文学部論集文学篇（金沢大学）八
- 国文学研究（早稲田大学国文学会）二十三集
- 季刊文学語学（全国大学国語国文学会）十九号
- 文芸と思想（福岡女子大学文学部）二十一号
- 愛媛国文研究（愛媛国語国文学会）九号、十号
- 滋賀大学国語国文学（滋賀大学国語国文学会）六号
- 中央大学国文（中央大学国文学会）四号
- 尖塔（クラブ尖塔）三十九号
- 文学論藻（東洋大学国語国文学会）十九号、二十号
- 美夫君志（美夫君志会）三号
- 成城文芸（成城大学文芸学部研究室）二十五号
- 紀要（愛知県立女子大学短期大学部）十一
- 国文学（関西大学国文学会）三十号
- 国語国文学報（愛知学芸大学国語国文学会）十三
- 文芸研究（日本文芸研究会）三十七
- 名古屋大学国語国文学（名古屋大学国語国文学会）八
- 日本文学（東京女子大学日本文学研究会）十六号
- 上代文学研究会会報（東洋大学国語国文学会上代文学研究会）八号
- 国語教育（初音書房）七号
- 甲南国文（甲南女子短期大学国語国文学会）八号
- 音声学会会報（全日本音声学者綜合学会）一〇六号
- 日本学士院紀要（日本学士院）十七の一、二、三、十八の一
- 日本文学（未来社）九の九、十一、十二、十の一、二、三
- 国語国文研究（北海道大学国文学会）十八号、十九号
- 語文（日本大学国文学会）十輯
- 文芸法政（法政大学二部文学文学研究会）二十七
- 文学論輯（九州大学教養部文学研究会）八号
- 一九六〇年度国際会議—出席報告第一部関係（日本学術会議事務局）
- 徳島大学学会紀要（人文科学）（徳島大学学芸学部）十卷
- 東北文化研究室紀要（東北大学文学部東北文化研究室）三集
- 青丘文学（青丘大学）
- 島根大学論集（島根大学）十号
- 和歌文学研究（国学院大学）十一号
- 人文科学紀要国文学・漢文学Ⅷ（東京大学教養学部人文科学科）二

十四輯

国文学攷（広島大学国語国文学会）二十五号

季刊国語教室（季刊国語教室友の会）十六号

学習院大学国語国文学会誌（学習院大学国語国文学会）第五号

平安朝文学研究（早稲田大学国文学会）

平安朝文学研究会 第六号

大東急記念文庫文化講座シリーズ第五回（大東急記念文庫）第七卷

日本学術会議月報（日本学術会議事務局）四月号

金沢大学教育学部紀要（金沢大学教育学部）第九号

国語国文学研究（青丘大学国語国文学会）第四輯

神戸商大論集一号昔語り問はず語り（淵江文也）

” 二 物語的美質 （ ）

三重大学国語国文学研究第三号長恨歌琵琶行訓読考異（矢野文博）

国学院雑誌六十二ノ一春雨物語「海賊」の典拠（坂井与）

北海道岩見沢農高紀要一、義理の研究序説―範圍とその方法について（坂井与）

編集後記

今夏は格別暑さが身にこたえたが、これは別に断のせいでもなさそう。それにもめげず、お忙しい中をわざわざ御執筆いただいたかたがたの御好意を有難いものと思う。

本誌編集集中、去る十月十四、十五日には、俳文学会全国大会が太宰府で盛況裡に行われ、また近く十一月十一、十二両日国語学会秋季大会が本学で催されることになっている。研究室はその都度、猫の手も借りたいほど多忙を極めるが、当地がかくも「学会づく」ことは、一同張り合いもでて、結構なことだと思う。大方の御支援を
希う次第。
(春日)

第十四号 原稿 締切

昭和三十六年十二月二十日まで

四百字詰原稿用紙二十枚以内

見出せるものに他ならない。しかし結局作者はその主眼とした「とりかへ」事件そのもので結末づけずに、後日譚の後半を添加せずには居れないでゐる所に「をかし」の世界を基底として物語を進め出し乍ら「あはれ」の世界に心惹かれざるを得なかつたことが窺はれるのである。換言すれば、それはこの物語が「をかし」の物語としての堤中納言物語的な短篇的世界を骨格とするものであり乍ら短篇物語としては終らざれてゐないといふ点によつても明らかである。即ち物語の長さに於いては源氏物語や狭衣物語にはもとより及ばずながら、竹取、落窪、浜松中納言物語に比して長篇であるこの物語は決して堤中納言物語の各篇に見られるが如き短篇物語として終つてはゐない。しかも内容に於いても、主人公の生立ちより始めてその後日譚を加へ「おほよそ三四十年ばかりのこと」を「みかどは三代にわた」つて記し（岡本保孝「取替ばや物語考年立」）てゐるのである。従つて根底に於いては、たとへ堤中納言物語の世界に通ずるものがあるとしても、かゝる長篇性を具備する以上、その潤飾に當つては矢張り源氏物語を頂点とする長篇物語の持つ伝統的な「あはれ」の世界を脱却し得なかつたものといへよう。茲に新しい「をかし」の世界を企図しながら徹し得なかつたこの物語に於ける「あはれ」の意義が見出されて来ると思ふのである。

付記 引用文は「国文大観」所収とりかへばや物語に拠つた。

本稿は岡山大学教授森岡常夫博士の御懇切なる御指導を頂いた。記して謝意を表します。

○西日本国語国文学会翻刻双書刊行会より

すでに「誹諧餘枕」（第一回）の配本を終えましたが、以下、「原撰本新撰万葉集・歌合二種」「幼童抄」（連歌作法書）・和訓押韻」「寛永廿一年俳諧集」「平安期私家集」「狐媚倭字抄」「中世和歌集」「上方洒落本集」の順に続刊予定です。入会御希望の方は、現在若干の余裕がありますので、お早めに左記要領でお申し込み下さい。

一、刊行方法 年四回配本。第一回は本年八月

二、会費 一冊約三五〇円。刊行毎に金額を明記徴収させていただきます。

三、入会申込 左記宛入会金三五〇円を添えて申し込んで下さい。入会金は最終回配本費用に充てます。

福岡市箱崎九州大学文学部国語学国文学研究室内
西日本国語国文学会翻刻双書刊行会
(振替福岡一五〇九二番)